

お茶うけ 第63話

生きる意味

『人生の価値を考える - 極限状況における人間』(武田修志著)は、大学の助教授である著者が自分のゼミナールで、学生たちに人生の意味や人間の根本問題をじっくり考えさせるために、死や絶望などの極限状況に置かれた人びとが、苦みのなかでどのようにして「生きる意味」を見いだしていったのかを、平易な言葉で語った講義録です。私は、この本で紹介された人びとの生きる姿に深く感動しました。と同時に、著者が人生について、若い学生たちが理解しやすいように、出来るかぎり具体的に自分の言葉で語りかけ、そして彼らと一緒に人生の意味を考えようと努める真摯な姿に強い感銘を覚えました。

この本の著者は、現在の日本の世相の影響を受けて大学生の多くが「衣食足りて人生の意味を知らず」の状態にあることに危機感を抱き、ゼミナールを受講する学生に、人生の意味や人間の根本問題をじっくり考える機会を与えたいと思い立ちます。

そして、最近の学生は「難しい本」を読まず、抽象的な議論に興味を示さないので、いわゆる「人生論」をテキストとせず、「なんらかの事情によって、極限的な状況に追い込まれた人が書いた」、「個々の人間が具体的に生きている場面」をテキストにします。

この本には、ゼミナールに使ったテキストの中で、学生たちの反響が大きかった5人の書いた5つの作品(テーマ)を、著者がさらに5回、10回と丁寧に読み返し、そこで読み取った事柄が載っています。



1. **星野富弘の場合** - 『愛、深き淵より』から
(事故で肩から下が全身麻痺になる)
2. **岸本秀夫の場合** - 『死をみつめる心』から
(癌を告知される)
3. **青年士官の場合** - 『戦艦大和の最後』から
(特攻隊員として出撃)
4. **ヴィクトール・フランクルの場合** - 『夜と霧』から
(アウシュヴィッツに収容される)
5. **ソクラテスの場合** - 『ソクラテスの弁明』から
(死刑宣告を受ける)
(註)『』はテキスト、()は極限状況。

例えば、癌を告知された岸本秀夫は、「死をみつめる」うちに、「よく生きるとは、これこそ自分の一生にとっての道と考えられるものに、自分の一切を捧げ尽くすこと」であるを知って、10年にわたる闘病の生活の間、自分の大学教授としての研究や講義に全身全霊を傾けて、生き生きと活躍を続けます。

著者は学生たちと一緒にこのようなテキストを読むときに、権威ある文献の言葉を引用して安易な注釈を加えたり、著者自身ですら学んだ知識に頼って解釈するのではなく、書かれている状況を自分自身の問題と捉えて、ひたすら「自分の心と頭脳」とで人生と人間を考える姿勢を貫きます。このゼミナールには学生たちも積極的に参加して、実り多い議論がなされたとのことでした。

私は、このような「人生を自分たちの言葉で考える」ゼミナールが各大学に広がり、より多くの若い学生たちに人生を考える機会が与えられることを期待いたします。

この『人生の価値を考える』は、1998年の第七回山本七平賞の推薦賞を受賞しました。(主催 PHP研究所)

以上

参考資料:

『人生の価値を考える - 極限状況における人間』 武田修志著 講談社現代新書